尋問・自供

●25人のミステリ・ライター

尋問・自供

●25人のミステリ・ライター

木村二郎

早川書房

検印廃止

尋問・自供
——25人のミステリ・ライター

昭和五十六年六月十日　印刷
昭和五十六年六月十五日　発行

定価　一三〇〇円

著者　木村二郎（きむらじろう）

発行者　早川清

発行所　株式会社　早川書房

郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話　東京（二五四）二五二一（代）
振替番号　東京・六—四七七九九番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

印刷・製本／中央精版印刷株式会社

尋問・自供

——25人のミステリ・ライター

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

兄貴、木村太郎に捧ぐ——

一緒に見た《87分署》《マイク・ハマー》《裸の町》《ヒッチコック劇場》《ペリー・メイスン》《旋風児マーロー》《サンセット77》の思い出に

目次

プロローグ 9
ディリス・ウィン 15
トマス・チャステイン 23
スタンリイ・エリン 33
ジャスティン・スコット 47
ウィリアム・E・チェイムバーズ 57
ロバート・B・パーカー 67
グロリア・エイモリー 79
ジョイス・ハリントン 87

ヘンリイ・スレッサー 99
S・S・ラファティー 113
ローレンス・ブロック 125
ハーバート・ルーム 137
クリス・スタインブラナー 147
フランク・マクシェイン 157
エドワード・D・ホック 169
ゲイアン・ウィルスン 183
ジェローム・チャーリン 195
ドナルド・E・ウェストレイク 207
オットウ・ペンズラー 225
ハロルド・Q・マスア 239

ジョン・ボール 253
ビル・プロンジーニ 267
ロジャー・L・サイモン 281
キン・プラット 293
ウィリアム・F・ノウラン 307
エピローグ 323

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

プロローグ

おれは東65丁目の一番街とヨーク街のあいだにある、そのビルディングにはいった。表にある四つのプラスティック製のゴミ箱のふたは、あふれるゴミ袋を押さえつけていた。緑色の外ドアをあけると、左側に二十三個のブザーが机上加算器のボタンのように並んでいる。名札のついていない3のブザーを押すと、奥のどこかでチリリリンとけたたましくベルが鳴った。内ドアの磁石錠がはずれる音を待ったが、聞こえてこない。

ガラスから中をのぞくと、木村二郎が歩いて来るのが見えた。トンボ眼鏡をかけ、スポンジぞうりをつっかけている。濃紺のコーデュロイ・ズボンをはき、濃紺のクルーネック・シャツに青のプルオウヴァー・スポーツシャツを着ている。彼は内ドアをあけ、階段の上がり口のすぐ横にある3号室に導いてくれた。

部屋の中は散らかっていた。ベッドルームのベッド・シーツは乱れたままで、未熟な泥棒にはいられたように、タンスの引き出しがあけっぱなしだ。リヴィングルームのデスクは雑誌やカセット・テイプやカメラに占領され、その上でハガキを書くこともできない。オットマン・カウチの上には新聞の切り抜きがすわり、ペイントのはげかけた黒い床には本や雑誌が積みあげてある。頭上の螢光燈に照らされた長方形のテイブルの上にもノウトブックや請求書が散らかっているが、コーフィー・カップがのるぐらいのすき間が見える。

おれは新聞の切り抜きをどけて、カウチのすみに腰かけた。
彼は天井がくずれ落ちかけた台所に行った。「お茶でいいかい？」彼はおれの返事を待たずに、茶の葉を、口のかけたティーポットにいれ、沸騰した湯を注いだ。
デスクの上を一インチぐらいのごきぶりが触角を左右に動かしながら、歩き、筆立てびんの角を曲がった。
彼は、縁のかけたカップを片手に一つずつ持ち、テイブルの上にのせた。すみのトランジスター・ラジオからソニー・ロリンズのテナーが聞こえる。
「さて、仕事というのは何だ？」おれは熱い茶をすすった。
「いろんなミステリ作家を尋問してほしいんだ」彼はすぐ本題にはいった。
「どうしてだ？」
「《ハヤカワ・ミステリ・マガジン》に作家の告白を連載したいからだ」
「人妻の告白みたいに、私生活をアラってほしいわけか？」
「いや、作家の経歴、作品について、白状してもらえばいいんだ」
「どんな作家に当たればいいんだ？」
「無名の新人でも、有名な大物でもいい。とにかく、七〇年代後半のアメリカ・ミステリ作家ならいい」
「ホトケになった作家とは、霊媒を使って話しても、無駄だってことだな」
彼はうなずいた。
「LAとか、フリスコとかへ行ってもいいのか？　ハメットやチャンドラーの後を継ぐ優秀な作家たちが住んでるぞ」
「いや。できれば、マンハッタンに住んでる作家にしてくれ。いくら、スーパーセイヴァーを利用したって、

西海岸までの旅費は出せない」
「あいかわらず、けちだな」
彼はおれの皮肉を無視した。「連載コラムのタイトルは〈マンハッタン・ミステリ日記〉というんだからな」
「あんたの書くコラムは、いつもタイトルがまずいね」
「ブルックリンなら行ってもいい。ニュー・イングランドに行く時は相談してくれ」
「〈ボストン・ミステリ日記〉に変身するわけだな」おれは薄笑いを浮かべた。
「一カ月にだいたい一人の割合でいい」
「どんな報告書がほしいんだ？　何枚の控えがほしいんだ？」
「うん、そうだった」彼は立ちあがって、テイブルのがらくたのあいだから補聴器のような箱を出してきた。
おれが壁のアステア＝ロジャーズのポスターをながめていると、彼は何も言わずに、おれのシャツの前ボタンをはずし始めた。
「何をしやがるんだ？　変態じゃないか？」
「あら、そうかしら。この小型盗聴器をシャツの下に忍ばせるだけだ」彼はおれの体に接着テイプで盗聴器を映画ポスターのように貼りつけた。
「このテイプをあんたにわたすだけでいいんだな。写真はいらないのか？」おれはシャツのボタンを自分でとめた。
「ここにライター型隠しカメラがある」
「でも、おれは煙草を吸わないんだから、不自然だぜ」

「マリワナ煙草に火をつける格好をすればいいだろう。それとも、放火する格好をするとかね。藤四郎じゃないんだから、何か口実を考えろよ」

「ライターの火が十回続けて点くかどうか、賭けをするのはどうかな?」彼にはおれの楽屋落ちがわからないようだ。「よし」おれはジッポ・ライターに仕込んだ小型カメラを受け取り、ポケットから太い円筒形のものを取り出し、導火線に火をつけた。「それとも、こんなのはどうかね?」

「ダ、ダイナマイト!」彼は、ビッグ・マックが丸ごとはいるほど、口を大きくあけた。顔じゅうに恐怖の色が広がった。

おれはそれ以上何も言わずに、そのアパートメントを出た。今ごろ、木村二郎はダイナマイト型のろうそくに見とれていることだろう。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com